

肝硬変ではどんな症状がでる？

肝臓の疾患の原因は多岐にわたります。代表的なものには、ウイルス性肝炎・脂肪肝・薬剤性肝障害・自己免疫性疾患・代謝以上などがあります。患者さんそれぞれ原因は異なりますが、慢性的な肝臓の炎症の状態が持続することにより肝硬変の状態に移行することがあります。今回は肝硬変でどのような症状がでるのか代表的なものについて特集します。

肝臓の主な働きについて

肝臓はおなかの右上（右上腹部）に位置しています。成人であれば1〜1.5kgほどの重さがありおなかの中では最も重い臓器です。肝臓は複雑かつ多くの働きを担っているため腎臓の人工透析のような代替手段は現在の医学では確立していません。

この肝臓の働きのなかでも①腸から吸収した栄養素の代謝、②体に有毒なものの解毒、③胆汁を産生、以上3つの主な機能に関連した症状を説明します。

① 腸から吸収した栄養素の代謝

食事を摂取すると、食べ物は胃酸で溶かされたあとに肝臓の消化液である胆汁や膵臓の消化液の膵液と混ざり主に小腸で栄養素が吸収されます。吸収した後は血流にのって肝臓にその栄養素が送られます。肝臓は栄養素（タンパク質・糖質・脂質）の分解や合成・貯蔵を行っています。これらに関連した採血項目としては総蛋白・アルブミンなどがあります。肝硬変で体の栄養素の代謝が悪くなると栄養状態の悪化がおきます。アルブミンは血液中に水分を保つ浸透圧にも重要な役割を果たしており、肝硬変でアルブミン値が低下すると血管内から血管外に水分が移動し浮腫や腹水が出現しやすくなります。余剰な水分にたいしては塩分の過剰摂取を控えたり利尿剤やアルブミンの底上げを図ることで対応します。

② 体に有害な物質の解毒

肝臓は体にとって有害な成分を分解・解毒し体から排出しやすい形に変化をさせてくれています。お酒に含まれるエタノールや食べ物が腸内細菌により処理されて

作られるアンモニアなどを処理してくれます。肝硬変で解毒などの処理能力が低下する結果として自覚症状として現れるものの代表は肝性脳症です。アンモニアを尿素に変換する能力の低下やアミノ酸のバランスの崩れにより肝臓が悪いことよって脳へ影響が出て意識の障害が引き起こされます。自分がいる場所や日付などを答えるのが難しくなったり系民勝ちになったりすることがあります。内服薬での治療のほか、タンパク質の過剰摂取を控える、脱水・便秘を予防するなどの日常の対応も重要となります。

③ 胆汁を産生

胆汁は肝臓でつくられる濃い黄色〜茶色の消化液です。解毒した成分を腸に排出したり、食べ物の栄養素を吸収するための成分を含んでいます。肝臓の機能が低下するとこの胆汁がうまく産生されなくなるため色素の蓄積（黄疸）や消化吸収効率の低下、各種代謝産物の蓄積がおきます。

以上、今回は肝臓の働きとそれに関連して起きる体の変化について特集しました。